

炭鉱閉山に伴う広域移動経験者のライフヒストリー  
——生活世界の再構築に着目して——

坂田勝彦（東日本国際大学）

1. 報告の目的

本報告は、炭鉱の閉山に伴い他地域へと移動することになった人々の経験をもとに、不可逆的な社会変動が彼らの生活と人生にいかなる影響を与えたか、また、生活を再び築き上げていくために彼らが行ってきた実践について検討する。具体的には、杵島炭鉱の閉山後（佐賀県杵島郡、1969年閉山）、他地域へと移住し再就職した元炭鉱労働者のライフヒストリーの分析を通して、上記の課題に着手する。

2. 分析・考察

産業革命のエネルギー源であり、近代以降の日本において財閥資本の根源的蓄積を支えた石炭産業は、1950年代半ば以降、原油や廉価な海外炭との競争に巻き込まれ、慢性的な不況に陥った。この「エネルギー革命」の下、「石炭産業合理化臨時措置法」（1955年）を端緒に、不採算炭鉱の閉鎖と優良炭鉱の選別とを掲げる「スクラップ・アンド・ビルド」政策が進められ、石炭産業からは多くの離職者が発生した。そして、高度経済成長期の当時、斜陽産業から成長産業へと労働力を移動させる「労働力の流動化」政策が推進されるなか、彼らの多くが新たな土地での生活を模索していくことになった。

炭鉱離職者のこうした状況については、その動態を数十年に渡って把握した量的調査（早稲田大学文学部社会学研究室ほか編『炭鉱労働者の閉山離職とキャリアの再形成 Part I～X』1998～2007年）、閉山後の地域の有様や離職者のネットワークに注目した質的研究（高橋伸一編『移動社会と生活ネットワーク』高菅出版、2002年）などがある。本報告はこれらの成果を踏まえたうえで、それまで暮らしていた場所を離れ、新たな生活と人生を歩んでいった元炭鉱労働者のライフヒストリーを考察する。そこからは、言語表現、生活様式、労働環境など、従前とは大きく異なる文化への適応という困難な課題に彼らが直面したこと、炭鉱労働者であった過去への様々な視線に苛まれてきたことが明らかになった。一方で、ある者は従前の生活への愛着を保持しつつも新たな人間関係を職場外のサークル組織等への参加を通して形成し、ある者は従前の経験を封印しながら新たな職場でのキャリアと人間関係を築きあげた姿が浮かび上がる。

3. 知見と結論

炭鉱の閉山という出来事は、「去るも地獄、残るも地獄」と当時形容されたように、労働者とその家族にとって、多くの困難を強いるものだった。だが、彼らは多大な労苦を経験しつつも生活を立ち上げ、新たな人生へと進むことを試みた。本報告は、杵島炭鉱の閉山に伴い他地域へと移動した人々のライフヒストリーをもとに、「エネルギー革命」という社会変動がいかなる暴力として現れたかを検討し、彼らが生活の再構築を巡って積み重ねてきた実践知の一端を明らかにする。